

乳幼児をもつ父親の父性意識に関する研究 — 父と子の絆の形成過程 —

数 田 早智子

<問題と目的>

親子関係に関する大部分の研究は主として母親ないし母子関係が中心となっている。親といっても母親を指すことがほとんどでもう一方の親である“父親”に対し目がむけられることは少なかった。父親研究はLamb, M (1976)の研究を中心に始まり、日本では90年代にはいて柏木(1993)らが始めてスタートしたばかりである。Lamb, Mらの研究は父親にたいしても乳児は愛着を形成し、認知面や運動面において母親とは異なる役割を果たすことを指摘し、ヘンリー・B. ビラーは子どもの性役割の同一性の対象となることに注目しており、父親の存在は子どもにとって母親とは異なるもので重要な存在であるということを一連の研究によって明らかにしている。このような研究の流れの中で日本においても社会が変わり父親像も変化してきている現在、女性も母親としてだけではなく社会進出をし、子どもを育てるのは夫婦共同の作業である中で父親にも目がむけられる必要がでてきた。

柏木ら(1996)は生涯発達心理学の視点から親としての発達を考えており、本研究でも父親を親になっていく存在ととらえ、男性が父親になる過程をとらえたいと考えた。妊娠に始まって出産そしてそこからの成長にしたがって父親はいかなる過程をたどるのだろうか。M. Greenberg(1974)は父親とうまれたばかりの赤ちゃんとの結びつきをエンゲロメントという概念によってあらわした。この初期の高揚した赤ちゃんに夢中になる過程は普遍的なものであり父親が子どもに強く影響されると考えている。この男性に特有なエンゲロメントは父親の自尊心と人間としての価値を高め成熟をもたらし、子どもから強く影響を受けるといふ。母親とは質的に異なる過程があるとされており父親特有の過程を見ることが有用な概念であると感じ、本研究ではこの概念を父親の子どもへの感情とみなし、父親としての意識の成立過程についてみていきたい。

<研究 I >

目的：父親が子どもについてどのように感じているのかをエンゲロメントの概念を参考にし子どもへの感情の強さを質問紙調査により測定し、夫婦間の関係、母親としての妻へのサポート意識、父親自身の家事育児への参加との関連を明らかにする。

方法：第一子のみを持つ初めて父親になった人を対象として質問紙調査を行った。質問内容は、子どもへの感情、家事育児参加度、母親へのサポート意識、夫婦の愛情を測定する5尺度で構成されたものである。愛知県内の3, 4歳児, 1歳6, 7ヶ月児健診を受診した主に母親を通じて父親に渡してもらう形で配布、郵送による返却があった72名を対象とした(回収率41.5%)。対象者の属性は3, 4か月児45名, 1歳6, 7か月児26名であった。

結果と考察：質問紙の各項目について因子分析を行ったところ家事育児参加度、母親へのサポート意識、夫婦間の愛情の3尺度は1因子として考えられ、子どもに関する感情尺度においては2因子と考えられたが内的整合性を考慮し、1因子構造として扱うこととした。各尺度の α 係数は.71, .89, .89, .74が得られている。子どもに関する尺度はM. Greenberg(1974)の先行研究を参考に独自のものも加え作成したが、質問文がわかりにくく限定的であったためこの項目得点が低いからといって子どもへの感情がないわけではなく自由記述の感想を参考にするともっと複雑なものがあったように考え、質問項目をより検討する必要があるように考えられた。

各尺度間の相関係数を求めたところ、父親の家事育児行動と母親へのサポート意識との間、夫婦間の愛情と母親へのサポート意識との間に正の相関(.37, .45)が見られた。また子どもへの感情尺度を説明変数とし、その他の尺度を目的変数として重回帰分析を行ったところ、子どもに授乳したときの感情においてのみ家事育児参加度が14%の説明率を持ち子どもへの感情においては家事育児の参加の度合いの寄与によるものが大きいことが今回の調査においてわかった。また子どもへの感情は調査を行った現在が最も強く、時間が経つにつれて高まってきたことが分かった。また自由記述においても子どもの発達や、接触を持つにつれて父親自身影響を受け感情が高まってくることを示された。

また人間として、親としての成長を感じている父親もあり、子どもから強く影響を受け、父親として意識の変化が見られた。また3, 4ヶ月児と1歳6, 7ヶ月児の父親とでは3, 4ヶ月児の父親のほうが母親へのサポート意識が高く子どもの成長時期、育児に対する慣れなさなど子どもの年齢という要因に影響を受けていることが伺えた。

〈研究Ⅱ〉

目的と方法：研究Ⅰでの質問紙調査では子どもへの感情尺度に問題があり、限定的で父親自身の細かい感情の表現が取り上げられてなかったこと、子どもへの感情の内容や、子どもが産まれるまでの感情の変化、つまり父親になる準備性に焦点が当たっていなかったことから質的な検討を試みるために面接調査を実施した。

調査対象者は研究Ⅰでの質問紙調査の末尾で調査協力を呼びかけ協力の意志があった父親6名であり、半構造化面接を行い、事例研究を行った。対象者のうち出産前後に何らかの問題があったものが3名、出産に立ち会ったものが1名、生育歴的に親に対する思いを強く持っていたものが1名と結果として一般的なデータとはいえないという問題があるが、かえって臨床的な観点からみると興味深いものであった。ここでは3か月児を持ち、新生児仮死で生まれ、出生時に不安が高かった事例を報告する。

case 1：妻、子ども（3ヶ月 男児）、父親の3人の核家族。父親の職業は鉄道関係で仕事は不規則で家事はあまり手伝わないが、子どもの世話はオムツ替えなど行っている。以下は面接の内容に基づきまとめた。

「子どもができたときわかったときはうれしいのと不安なのと半分ずつ。複雑な心境だった。」〈?〉「漠然とした不安で、何を不安に思ったのかわからないけど……。」といったふうにうれしいだけでなく漠然とした不安を抱いていたことがわかった。また子の父親はもともと子ども好きであるが、「うまれてからは自分の子どもが一番かわいい。すごくかわいい。」と感情表出がそれほど高い人ではないようだが子どもがかわいくて仕方がないというような現在の気持ちがにじみ出ている。また出生時の気持ちについてたずねると「仮死状態でうまれてきたため保育器に1wはあって全然あえなかった。心配だった。経過が順調だったから良かったですけど。」と心配でよろこびどころではなく不安いっぱいのお会いだったことが伺えた。父親としての実感については「まだ考えてませんね。まだかわいくてしょうがないですね。」と出生時の不安がやっとなくなり現在3ヶ月

時点で家庭でのふれあいの中から時間的には遅れて子どもへの感情が強く夢中になっている様子が伺えた。まだ父親としての実感は湧かないようだった。

6ケース全体からは子どもができたときわかったときはまだ実感がわかない父親がほとんどであり、初めて抱いて重みを感じたとき、4ヶ月年になってやっとといったように体の変化のない父親は母親に比べ時間がかかるようである。また子どもがかわいと思う父親の意識は子どもの笑ったり、言葉を話すといった子どもからの自発的な反応が、刺激し、感情を高めていたと考えられ、父親の意識は子どもの成長とともに形成されていくものといえよう。

〈総合考察〉

本研究では父親としての意識の成立過程とそれに関わる要因について質問紙調査と面接調査によって検討した。このことによって家事育児の参加の度合いは子どもへの感情に影響し、子どもへの感情は子どもに関わるにしたがって強まっていくことが示された。しかし夫婦間の愛情と子どもへの感情との間には関連性が認められなかった。このことは質問項目の問題や方法が父親の感情の変化をつかむものとして適当でなかったこともあり検討の余地が多いといえよう。また感情の違いを考える上で必要な父親自身の準備性が問われていなかったこともあり、面接調査を行ったが、今回の調査では妊娠経過中、出産時の問題は後の経過が良好である場合悪い影響を及ぼさなかった。時間的には喜びの感情や子どもがかわいという感情が遅くなるということがあってもM. Greenbergのいうように遅れるが必ず表れてくるようにも思える。またこれには父親自身の年齢、人格的要因、夫婦関係などが関連していると思われる。また今回の調査では子どもの年齢が低いこともあり自尊心や自分の価値が向上にしたように感じたといったようなエンゲロメントの最終的な過程にはまだいたっていなかったが、今後の過程の中で作り上げていくものであり、父親自身の成長も子どもから影響を受けながら父と子とで作り上げる絆であることが示されたといえよう。